

## 認定証のいわれ

### 西洋のツタ

緒方 富雄

臨床病理技術士資格認定証にはツタの地模様が印刷されている。(1970年度から)認定証の文字のさまたげにならないように、うすく印刷してあるので、よくわからないかもしれないが、実は西洋でよく見かけるツタで、わたしがうつして、それをつかったのである。

日本でツタというと、普通、吸盤のような装置で岩や石垣や竹垣や壁などにしっかりくっついてよじのぼり、夏にはつやつやした特有の葉がかさなりあってしげり、秋にはうつくしく紅葉して、ツタモミジといわれて人の目をよろこばせ、冬になって落葉するツタのことである。

学名は *parthcnocisszs tricuspidatf*、英語で **Boston ivy** とよばれる。

西洋でただアイヴィ (*ivy*)、あるいはフランス語でリエール (*lierre*) という、日本のツタと似てはいるが、葉は小型で冬に葉の落ちない常緑の灌木で、学名を **Hedera helix** というのがそれである。とくに **English ivy** とよびわけることもある。このツタには吸盤のような装置はなく、葉が細い茎につく場所にちかく気根のような不定根を出してこれで固定するが、自力で壁をよじのぼる力は、日本のツタにはかなわない。しかし地面をはわせると、一定の間隔に根をおろしていくから、養分の補給体制は万全になる。この根の部分をつけて切り取って移植すればいくらかでもふえる。細い茎がたくさん出て、葉がたがいにかさなりあってしげるので、地面は完全におおわれる。だから **ground cover** として愛用される。日陰でもかまわないので、重宝がられ

ている。地面でもすこし人工的に固定する工夫をしてやれば、地面とおなじように、壁面をおおいつくす (**wall covering**)。上からたれさがるようにすれば、なんの手間もかからない。

西洋ではこのツタを上手にいかして、ひろい斜面をおおったり、壁をおおったりしているが、冬でも、葉の色がすこし赤黒くなる程度で(土地にもよるが)、葉がおちないから、冬の風景にうるおいをあたえてくれる。パリでは人のよくとおる場所の、人の目につく壁面や地面にこれをうえてあるので、パリのリエール印象は格別に深いようにおもわれる。そのパリのリエールを持ってかえった友人が、自分の家の庭でそだてたうえで、1m くらいのながいものを 4~5 本わけてくれた。それがいまわたしの家の庭でよくそだって、地面や壁にそれぞれおもむきをそえてくれている。

認定証にこのリエールをあしらったのは、臨床病理の仕事に関係する人々が、このツタのように冬にも落葉せず、のびていっては根をおろし、根をおろしてはまたのびていく強い生活力にあやかってほしいとおもうからである。リエールは何世紀にもわたって生きつづけ、しかも老いることがない。

フランスではこのリエールを「変らぬ愛情」のシンボルというのも、なるほどとおもう。わたしは、パリのあるふるい病院の地階の窓からリエールのすばらしい斜面を見た。その感動が、パリから来たリエールを認定証とむすびつける動機の一部となっていたかもしれない。